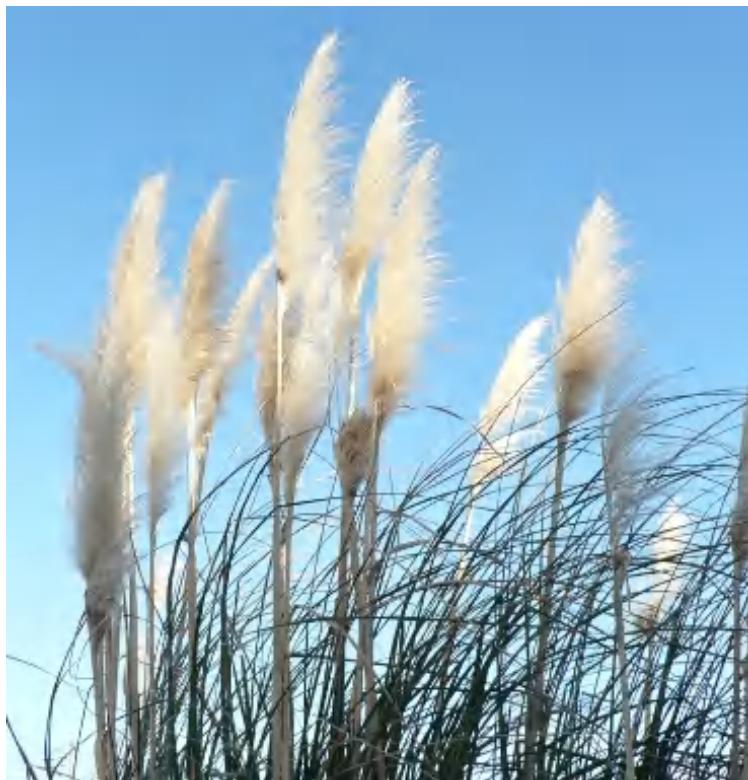


白金誌

1月号



平成30年一月発行

第83号

定例句会（毎月第三金曜日 アビスタ会議室）

仲本興正

二月十六日（金）正午～三時第五兼題..針供養、黄梅

三月十六日（金）正午～三時第三兼題..鷹化して鳩となる 春雷

四月二十日（金）正午～三時第三兼題..未定

兼題句参考句二月十六日分 針供養、黄梅

あじきなき日を送りつゝ針供養

高橋淡路女

天井に日の斑ゆらめく針供養

桂信子

針供養にも夕影といへるもの

深見けん一

黄梅や堰越すときの水ひかり

河野南畦

黄梅の影石に在り土に在り
雨けぶる西湖蘇堤の迎春花

依光陽子

石原八束

月例句会報

（'18／1／19 10名欠3 新年一般）

光成高志

輪飾やEMバケツ置く戸口

紅白歌合戦佐渡の荒海丘みどり

将門の井戸に社に初詣

満月の残る三日の日の出哉

膝までの辞儀して御慶申しけり

初旅のバス全面に富士ひとつ
喧嘩にも初を冠して江戸っ子は
ディズニーの筆よりこぼれ嫁が君
一張羅でしかと啼きたる初鴉

裏白に日の当たりたる昼餉時

寒満月見て動くなり窓の蠅

増田陽一

ベランダに妻来て十二月まで咲けり

深海の燐光なして煮凝れる

蒟蒻を煮て足りるなり年の酒

偷み来し冬薔薇ほどの暖かさ

松村幸一

永らへて元日といふお年玉

撮るだけの舞妓との縁お正月

羽子板の思ひ深げの豆絞り

胃ろうの妻よ今年はダヤモンド婚

姫始なかりしごとく割烹着

光
みち

どんじ場の要に淨め塩を撒く

飯田孝二

神棚のタイの仏も煤払ふ
南へ野川の伸びる初景色

雉發つて驚かさるゝ初詣

歯固めのするめの足をひとつづつ

礼者の子成績表を携へて

吉羽多美子

年の瀬や女子会と云ひ老ひ集ひ

朝酒を酌み合ひ老ひの三ヶ日

格子戸の漢方薬屋鏡餅

七種粥炊く背に母の割烹着

参道に神説く牧師初不動

佐藤宏之助

傷いゑし背をなぞりゑる初鏡

ひとり居にバラード聴くや三日暮れ

繭玉の金三両の重さかな

座にひとり雪女郎かや句に遊ぶ

バンドネオン瞼まなぶたに降る冬銀河

倉田紀子

浅野正美

二十戸の村に育ちて注連貫ひ
手車に載せて解体大鮪

懷妊を事務服に秘め初写真

初みくじ大師の杖に花結び

初詣願ひは同じ手をあはす
初日の出広がる雛鳩が飛ぶ

初場所や力士呼ぶ声沸き上がる

福詣背広姿の後につく

寒椿枝移りする目白かな

武者昭七

初詣蠟燭の灯のゆらぎをり

田隠しがきついとぐづる福笑ひ

光成高志

幾つかの病魔抱へて新春はる迎ふ
雪積むや演歌漏れくる軒の先

寒鴉啼き交しつつ歳暮れぬ

振り仰ぐ空一面の冬の星
寒春散り敷く坂を登り切る

御文庫本
貢状書

遠霞沼ひろびろと初明り

蠟梅の香りゆかしき松納め

寒鮎の鉤懐かしき熑熑かた。

初詣親の真似して鈴鳴らす

元旦や富士のお山は雲の中

年新誓い読む子の声強し

田宮
敦子

磯目健二

な遊び、それよりも目隠しがきつくて目ん玉が圧迫されるのはいやだと愚図つている子の心理と本質の所は同じですね。今の平成の世にも通底していると思いましたが如何ならんです。

南へ野川の伸びる初景色

み
ち

元日のめでたい気分の中はありていつも見馳われている
南へ伸びる野川も新鮮に見えて来てこれがあと初景色で
すという句。こういう作者の感覚を私は邪魔しないよう
に生活しております。

振り仰ぐ空一面の冬の星

昭七

冬の夜の満天の星を振り仰いだという内容の句になっているので、素直に、「冬の夜の満天の星振り仰ぐ」と書けばいいでしょう。星は見る他はないので、上五は省略

できますし、省略すべきです。従つて下五で作者の場所とか思いとかを具象化して切ればいいでしよう。私の「満天の星を戴き富士登る」のような有難みの気持を付けるとか、ここは仰ぐのではなく満天の星を一個の人間がかかる」とか、「ふりかぶる」とすれば、宇宙感覚が表現できます。「ふりかかる」が適切ですね。

撮るだけの舞妓との縁お正月

幸一
京都の祇園通りなどを歩いているという光景が見かけられる。お正月という季語も軽妙に書いてあってこれもめでたい現代の正月風景であります。

裏白に日の当たりたる昼餉時

雪女郎
裏白はすぐ乾燥して捲れてくるが、それにお構いなく日が当たっている昼餉時の情景である。ふと目に入った鏡餅に敷かれた裏白でしょう。静かな正月を過ごす家の佇まいとか、あるいは賑やかな一家の居間の佇まいが省略されています。

一句鑑賞

年の瀬や女子会と云ひ老い集ひ

磯貝健二
多美子

もはや中性というべき老女達が女子会と称して忘年会を開く。とまれ女子会を羊頭狗肉と苦笑する男性よ、それは僻目と知るべきだ。試みにその女子会を覗くなら花を添う粉黛、グラマラス、キュートで臍だけた妖美の

老女達が醸す華麗さと活力溢れる賑やかさに圧倒され、女性は死ぬまで女性であるという神代からの真理を痛感するに違いない。

座にひとり雪女郎かや句に遊ぶ

紀子
雪女郎は北国では恐れられる幻想の異質の存在だ。ひとり句会でそんな立ち位置に居るのではといつゝ疑念を抱きながら参加している。しかしいつたん運座が始まれば、そんな孤立の自意識から解放され作句三昧に浸つていて自分が居る。それぞれの異質を前提に作る俳句では、雪女郎的存在はむしろ必要不可欠なのではあるまいか。

寒満月見て動くなり窓の蝶

陽一
冴え冴えとした寒の大きな月が窓にあり、その窓硝子を微かに動く物がある。目を凝らすと一匹の冬の蝶だった。それはまるで月面を這つているように見えた。遙かなる距離感と巨大と極小が無化し同列に。その錯覚が季節感を髣髴とさせる句を産んだ。

蒟蒻を煮て足りるなり年の酒

陽一

妻し在らば心づくしの佳肴で酒が飲めるだろうが、今はその妻はこの世にいない。蒟蒻なら不器用な自分にも煮ることが可能。美味しい酒と蒟蒻があれば、ほかに何が必要だらう。なにやら佐藤春夫の「秋刀魚の歌」に通じる哀愁だが、さらにこの句には深い諦観とその果ての自

足の思いが流れている。

ベルンダに妻来て十二月まで咲けり

陽一

高層住宅のベルンダに生前の妻が遺した、植木鉢の数々。その一つが新たに花をつけ年の瀬まで咲き続けた。早逝の愛人が花に化身して訪れるという物語が世上にある。寒風にもめげずに咲く花の姿に、在りし日の亡妻の姿と心根が重なつて思い出される。相聞歌というべき哀憐の情の溢れる佳句。

深海の燐光なして煮凝れる

陽一

海底の暗闇に燃える燐光は深海魚の発するいわば誘蛾灯。その燐光の残映を煮凝りに認めるや思わず喉が鳴る。たとえ地上で煮られても深海魚が海底で餌を誘引する如く人間の食欲に働きかけてくる面白さ。事実、寒の煮凝りは実に美味しいのだ。

懷妊を事務服に秘め初写真

宏之助

仕事始めの職場の点景。写真の人物が既婚女性なら、彼女のみ知る喜ばしい秘密である。だがもし不倫の結実を身に抱えてしまつた未婚女性なら、憂い深き秘密といふことになる。初写真なれば、清々しい笑みを浮かべる新妻の祝福すべき秘密と解したい。

永らへて元日といふお年玉

幸一

もはやフルコースを存分に生き抜いた。この元日から

は人生のデザートを思うまま賞味するぞというポジティブな老いの気概が頼もしい。死への一里塚と元日をとらえる無常観的思考の対極だ。

一句鑑賞

増田陽一

将門の井戸に社に初詣

高志

最強の武士として関東一円を治めたが、後に常陸国府を襲撃し瀬戸内の純友と共に国家反逆の名を着せられた將門、よく怨霊ともなつたけれど、ファンも多い。この地で將門を言つるのは地方的特色があつて地靈に因む主題は俳句の力である。ここは「井戸に」歴史があつて社は後の付けたりとか、地元作家の特色ある句ではないか。東北の俳人がアルティを言うのにも似ている。

南へ野川の伸びる初景色

みち

初景色というと人情的光景が出てきがちであるけれど、この純粹、簡明な彫刻的風景は良い。単純なばかりではなく、仮に南を東や、また西方になどと置き換えてみると妙な意味づけが出来ていざれも頂けない。「野川」が「大河」となつても困るのである。掲句には風土を背景にストイックな美しさがある。

胃ろうの妻よ今年はダイヤモンド婚

幸一

この句を僕は解説することは出来ない。涙のほうが先だつてしまふのである。「ダイヤモンド」という硬質の響

きと背後の年月への思いだけが救いであろう。さて次の一
句に言及しないと片手落ちになると思う。

一句鑑賞

飯田孝三

姫始なかりじごとく割烹着

ここに過ぎし時代の情緒たっぷり、「なかりじごとく」
が微笑を誘う。「割烹着」に昭和までの家庭婦人のつづま
しさ良さが見える。(それ故の色氣も、か。)

バンドネオン臉に降る冬銀河

アルゼンチンタンゴらしい曲が聞え、見上げた目には
鮮やかな冬銀河。ロマンチックな異国情緒のひと時であ
る。「臉に降る」が印象的。

わが余命ふとよぎるなり賀状書く

健二

旧知から喪中はがきも来尽くした歳末、枚数も減った
賀状を書いている。我は猶生存す、諸賢も存えよと。若
い者には判るまいが感慨をこめて書く。

寒椿散り敷く坂を登り切る

昭七

椿の多い海沿いの山坂か、危ぶんでいた急坂を「よく
登り切つたものだ」という感慨が眼目である。鎌倉あた
りか、と虚子のよく詠んだ散り椿の路を連想する。

手のひらの皺をつくづく初日向

孝三

啄木の「じっと手を見る」ではないけれど、小生など
は手が荒れて鱗、駆の嘆きであります。ここでは「つく
づく」の語に皺だけでない半生の哀歎と「日向」の安ら

ぎが見えます。

姫始なかりじごとく割烹着

幸一

新世帯の頃の回想だろうか。正月三日、厨に立つ主婦
然たる立居をして口をついた、ほのぼのと軽妙、洒
脱な一人称吟。

ベランダに妻来て十二月まで咲けり

陽一

ふと見るとベランダの小鉢に秋草の芽吹き、それに水
をやるのが日課となつた。みるみる蕾をつけ、花開き、
どうとう十二月いっぱい迄も咲き続けたのである。その
秋の花は一年前に亡くされた、夫人悦子さんの生れ代
りに違いない、陽一さんはそう思いつづけておられる。
膝までの辞儀して御慶申しけり

礼者の子成績表を携へて

みち

二句ともに日頃離れ住むお孫さんたちの新年來賀の図。
かつてお一人が駆けられた行いそのままのほほ笑ましい
光景である。お二人目を細め、さあさあお上がりお上がり
(前句)。障子破つて帰つたばかりと思つていた上のお
子さんはもう小学生、揚々、成績表を手にしてのお出ま
し。きっと上々の出来栄えだったに違いない。思いきり
お年玉を弾んだことでしょう。

喧嘩にも初を冠して江戸つ子は

興正

火事と喧嘩は江戸つ子の華。俳諧は庶民文芸の面目躍如、江戸つ子氣質丸取りの句。口誦の弾みがいのちの句、詠み口はそれぞれだが、「初」を「はじめ」と読ませて、中七「て」を省き、「冠し」とするのも一興だらうか。

懷妊を事務服に秘め初写真

宏之助

地球の年令は女性が支えるとは、隣国の諺だが、この頃の「婦人方を見るとそれどころではない。男たちにおい若者よしつかりしろと声かけたくなる」とも。われら昭和一桁生れ、つい「懷妊」を「事務服」の後にもつていきたくなるが、「秘め」といいながら「どかと冒頭におくあたり、巧まぬ平成の世相諷刺か。

一句鑑賞

これやこの爺の大吉初神籤

武者昭七
孝三

「これやこの」は驚きと喜びの表現。たまたま引いたお神籤に「大吉」とでたのだ。みずから「爺」と称するとおりこの先たいした余得もあるまいとたかをくくつていただけにこれにはびっくり。思わず「いやいやなんと大吉だそうだ。おどういたねえ。」そんな雰囲気が伝わってくる。それが明るく軽快なリズムに踊っている。

俳窓評論纂

* 1.8 の朝日俳壇歌壇に俳壇賞の句が載った。34回を数える。驚く勿れ、自然詠は皆無に近い。私が見たところ、40句40首計80の句首の内僅かに3つがそれらしいだけ。月渡る白神嶺々や除夜の鐘、雲流れゆく大雪野果つるま

初詣蠟燭の灯のゆらぎをり

敦子

杉木立の奥深い本殿にともるお灯明だろう。蠟燭の灯のゆらめきは神の降臨のしるしだ。作者はじつとそれに目をそそぐ。神と人が一つになる瞬間だ。焦点を灯明の揺らめきの一点に絞つたので社を包む闇の暗さも出た。

わが余命ふとよぎるなり賀状書く

健一

年々受け取る賀状も差し出す賀状も少なくなつていく。自分が出せなくなる日もそんなに遠いことではないといふ思いが胸をかすめる。届いた賀状よりもいつの間にか途絶えてしまつた賀状の主がおもわれるのもそんな時だ。

深海の燐光なして煮凝れる

陽一

厨房の一角から差し込んでくる一條のあわい燐光。それが卓上の煮凝りの鈍い反射を浮かびあがらせている。一瞬、厨房は深海の底に変貌する。深海の燐光浴びて鈍く光る煮凝り。煮凝りは今おのれのまことの居場所をえたのである。

で、日めくりの暦もわずか富士の雪宝永山の裾まで降り

ぬ、以上。他のものは皆人事詠、人がどうしたこうした
という人情を詠っている。私の感覚がおかしくなつてしまつたのか。荒海や佐渡によこたふ天河、とか、一輪の
花となりたる揚花火、とか、清滝や波に散込む青松葉、
初空や藍と齒の満たしあふ、のような心の澄んだ句は見
当たらない。因みに平成元年の朝日俳壇の選句欄を当つてみたら、自然詠は40句内10句は在つた。今は10%、
未満、30年前は20%台ということ。誓子先生の影響を
選者衆も受けていたのではなかろうか。それよりもここ
30年の間に地震・原発事故などの天災人災に見舞われた
日本人の心を表現したくなつたのかも知れない。

* 1.9 ひと欄に富士山学を究める世界遺産センターの初代館長遠山敦子さん（79）の紹介が載つた。富士宮市にある。新年も三が日に約一万六千人が観覧した。中学一年から静岡市より毎日富士山を望んだ。屹立した富士山を手本に生きようと思つた。今の世界遺産になつたのもこの人の取り組みに負う。隙間があると山中湖の別荘に夫と出かけ富士山眺める。「今や富士山は世界の宝。その宝の意味をずっと伝えて、いきたい」と。富士市に移住され先に富士山百句を上梓されたひろし先生を即思つた。私も遠富士を見える時に見て敦子さんと同じ思いを抱い

ております。

*異論のスヌメ欄（1.1）に佐伯啓思氏の異論が載つた。明治維新百五十年である今年（二〇一八）に今思う事を起稿するように頼まれたらしい。西郷どんをまたNHKが取り上げたことも動機になつたようだ。論旨は小林秀雄が疾に言つていたこと「私もそう思つて前号に一寸コメントしたことだ。昭和二〇年の敗戦が前半と後半を分ける中間に位置する。前半は明治からの近代化、戦後は第二の近代化であるとか。福沢諭吉や漱石が唱えていた不羈独立の精神、つまり「一身独立、一国独立」である。日本の近代化は同時に日本の西洋化である。これでは日本は溶けてなくなる。戦後の近代化はアメリカ化であつた。福沢の後継の「新・文明論之概略」は出て来ないのが現状だと嘆ぐ。近代化の宿命的矛盾をわれわれもどこかで気に掛けているから西郷が出てくるのではないかと結んでいる。（氏は先に自死された西部邁氏の教え子らしい。）

*天幕に風の大波ほづき市
菊の酒陶淵明も宿六も
逮夜経切目きれ目にちらろ虫
寒垢離僧獸のごとき声發す
搖れ揺るはニンフの宴糸桜
うたた寝のに鈴振る月鈴子

風孕む戸口に立てし補注網

袋掛莫座の繪本を風捲る

農畠餉莫座の蟻にも、ほん粒

大とんど火の粉リゲルを掠めたり

オラウーダン二日も常のドンゴロス

向日葵の種拋ぐ幾何学模様拋ぐ

大根摺る賢治の国は青き国

初午の供物へ鴉勘左衛門

飛花落花遠流絵島の部屋にまで

四時起きの星燐々と露の宿

春蘭の蓄めり土に叩頭し

今朝生れし目高目だけが泳ぎをる

向日葵を壺いつぱいに癌病院

これで木村貞恵さんの「山川草木」を全部読んだ。後

ろの「富士の国から」も読んだ。涙が自然に出て来た。

「蓬餅」の文章、私が子供の頃蓬を摘んでいる母の背に云々という所、その情景をはつきりとした映像として今も消えることがありません、と書いてある。私もまた

く同じ情景を未だにはつきり覚えている。何故か季語にまつわる過去の記憶は消えないのです。これを読んでこ

こまで打込んだ時、みちさんが帰ってきて、驚いたあー

という。毎週通っている体操クラブの仲間で、親しい友

であるMさんと新年会で同席し、向うから見せたい句集が手元にあるのだけれど、持つてくるのを忘れた、どういう人かと言ふと、最近亡くなられた貞ちゃんという人の句集である。読んで泣けて泣けてどうしようもなかつた。みちさんが俳句をやっているので、見て貰おうと思つていたのよと言われた。即座にそれは木村貞恵さんのことでしょうと言つた。なんで知つているのよと言ふの

で、かくかくしかじかでと話したというのだ。俳句は上に抜いたが、文章もいい。素直な文章であり、気取つてない。雨が降つたら雨が降つたと書けばいいをそのままにいつた文章です。貞恵さんが私らと同い年であることから親しみが湧いていた矢先にこういう縁がありました。みちさんはまだ色々私に言つたがそれは一々ここには書かない。この縁はひろし先生のお陰であります。

結ばれて朱の字綾なす初みくじ（彩138号）平野ひろし
火の山の無明寒星煌けり（〃）
荒海の微塵となりて冬の虹（〃）

赤まんま休耕田は花畑（〃）

手筒花火黒き傀儡が火の粉浴び（〃）

口一ウイーンパン屋の一段南瓜パン（〃）

木村トミ子
窪田かづ江
佐藤恵子

羅の座れりバスの向ひ席(〃)

稻架襖八海山の峰に雪(〃)

曼珠沙華鬱震はせて黒揚羽(〃)

秋の風ただ海だけが見えるカフエ(〃)

水に触れ水に映りてあきつ飛ぶ(〃)

皆跡堀の途切れ枯芭(東京ク1月)

石炭の匂ひの記憶初湯かな(〃)

一瞬の富士見逃さず発電車(〃)

掛飾舳先になびく出航船(〃)

乱雑に袋詰めされ札納(〃)

城跡をめぐる空堀枯芭(〃)

初紅葉磴の三百あと少し(あすか1月)

踏切を渡る左右に曼珠沙華(彩138号)

木曾谷や稻架に小蓑の青シート(〃)

山尾かづひろ吟行ノート(H301.7)

絵馬馬の腹ほど膨れ初詣

梅檀の一本倒す初仕事

初詣列一町二町じまでも

鳥捕りの孤独「銀河鉄道の夜」八から

武者昭七

平山三郎

〃

河端不三子

〃

清野かつ江

〃

万世遊璃子

〃

理佳江文男

〃

山尾かづひろ

〃

こだま

光成高志

〃

飯田孝三

光みち

〃

曼珠沙華鬱震はせて黒揚羽(〃)

秋の風ただ海だけが見えるカフエ(〃)

水に触れ水に映りてあきつ飛ぶ(〃)

皆跡堀の途切れ枯芭(東京ク1月)

石炭の匂ひの記憶初湯かな(〃)

一瞬の富士見逃さず発電車(〃)

掛飾舳先になびく出航船(〃)

乱雑に袋詰めされ札納(〃)

城跡をめぐる空堀枯芭(〃)

初紅葉磴の三百あと少し(あすか1月)

踏切を渡る左右に曼珠沙華(彩138号)

木曾谷や稻架に小蓑の青シート(〃)

山尾かづひろ吟行ノート(H301.7)

絵馬馬の腹ほど膨れ初詣

梅檀の一本倒す初仕事

初詣列一町二町じまでも

鳥捕りの孤独「銀河鉄道の夜」八から

武者昭七

銀河鉄道の中でカムパネルラとジョバンニは背中のかいがんだ赤ひげの不思議な老人に出会います。(髭や髪が赤いのは異界の人によるしです。) 老人は天の川の河原にやってくる鶴や雁や鷺やらの渡り鳥をとらえて押し葉にして売つては暮らしをたてているのです。もちろん二人にはそんな魔法みたいなことは信じられません。だから「鷺を押し葉にするんですか。標本ですか」と聞き返します。

すると老人はきつぱりと答えます。「標本じやありません。みんなたべるじやありませんか。」老人はいまどつてきたばかりだと言つてふたりのめのまえに鷺の見本をとりだして食べてみてみるようにすすめます。食べてみるとなんとそれはチョコレートのようにおいしい御菓子なのです。ジョバンニはそれでも信じられません。この男はどこかそこらの野原の菓子屋だ。ふたりをだましているのだと男をばかにします。かたわらにいたカンパネルラがとうとうおもいきつたというよう声をあげました。「こいつは鳥じやない。ただの御菓子でしよう」それを聞くと鳥捕りの男はあわてた様子で列車をおりていつてしまいました。この話はどう読んだらいいのでしよう。「銀河鉄道の夜」のなかの気軽な滑稽談と読めないこともあります。鳥捕りの言い放つた「みんなたべる」という言葉のなんと衝撃的なこと。

それが「生身のいきもの」だという事実を目の前に突きつけられたながらなお「お菓子だ」といはる偽善と傲岸さそれを賢治はいいたいのでしよう。ぼくらは毎日のようにそれがぼくらと同じ生き物だということを忘れて、あるいは知らぬふりをして他の生き物の「いのち」をおいしい、おいしいと喜んで口にしているのです。身を捨てて友を救つたカンパネルラにしてそうなのです。生きるために生き物どうしが他人のいのちを奪いあわねばならぬ悲劇からどうすれば抜け出せるのか。賢治にとつてそれは最大の関心事だつたのです。

芭蕉のかるみ以後 (39)

光成高志

蕉

黒鯛くろしおとく女が乳

前に美人を持つてきただので、こちらはお徳女という海女の豊満な乳房を付けた。芭蕉のよく世間を知つた付句である。黒鯛はクロダイと読ませている。ちぬではない。くろしの枕詞のようになに置かれている。これでおとく女が海女だとわかる。「嘲り」を受けているから醜女を嘲つたという解釈に走りやすいが、浮世は様々であつて美しいものがあれば醜いものもある、それが人生というもの、浮世といふものといつてある。歴史上の敗者に寄せる芭蕉の思いに通じると思う。

枯藻髪朱螺の角を巻折らん

角

前句の醜女を海女と見て、その赤茶けた枯藻なす長髪が朱螺の角に絡み巻きついてそれを折ろうとするだらうという。これも基角の幻想である。高藤武馬氏はこれをブレークの絵にもありそうな幻視的な神秘感があると書かれている。ブレークは陽一さんが詳しいと思いますが、如何でしよう。芭蕉より百年後に出了イギリスの詩人画家銅版画家であり、日本には柳宗悦が紹介、大江健三郎が傾倒した。先の倫敦五輪でエルサレムという作品が歌われた。

魔神を使トス荒海の埼

蕉

前句はブレークの幻視ではなく、日本の其角の幻想であるから、芭蕉は日本の古事記をもつて付けた。本居宣長の古事記伝以前でも読まれていたのだ。一番近いのは寛永二十一年版である。その大国主の國ゆづりの項に出てくる。天照大御神の使者として建御雷神たけみかづらが「出雲の稻佐浜の小浜に降りたりて、十挾劍とうからぎを抜きて、逆立しまに浪の穂に刺し立て、その劍の前まきに趺あみ坐まして、其の大國主神に問ひて言ひたまはく」の場面を付けた。魔神は建御雷神を指している。荒海の埼は朱螺の角を巻き折る程の戦いの場面にふさわしくするため小浜を変えたのだ。前句の其角の醜女は先に亡くなつた伊邪那美を指していると思う。黄泉平坂まで夫の伊邪那岐を髪を振り乱しながら追つかけた神話から基角の想像力で作った句ではなかろうか。それに対して芭蕉は古事記の神話

をまともに受けて換骨脱胎した句を受けた。どうも基角は神話の筋から奔放な想像力を働かせる才能がある。芭蕉はそこまで飛躍せず、筋を自分なりに変更した話に替えることが出来る才能。その微妙な違いが以後の二人の歩む道を異にしたのであろう。なお、建御雷神は鹿島神宮の祭神であり、4年後の貞享四年には鹿島詣での旅に出て神宮に詣でて、「この松の實ばへせし代や神の秋」を残している。私も平成元年芭蕉を慕つてお参りした。七尺もある直刀が宝物殿にあるが、右の十掬劍つかづまきの所縁のものである。

お便り広場（到着順、敬称略）

前略 冬至の本日白金霞十一月号拝受いたしました。光成様のタフぶりにびっくり。頑張つても物事すべてスマーズに進まぬ自分に呆れています。予定は皆崩れいろく邪魔が入り九十四歳はすることなすことスローに魔なつたと思つております。毎年済んでいる年賀状の表書きをやつと今頃している次第です。みち様からのお便りとゴッホのアイリスの咲くアルルの風景心和む絵ですね。折角お買い求めですので、お手許にあるべきをありがたく頂いてしまいます。先日來二度程購読料（誌代）の件お伺いしたつもりですが、確たる教示ないまま從来どおり二〇一八年（平成三〇年）お送り申し上げます。増額の場合はお申し越し頂きたく存じております。医者通

ひどうやらこうやら年の暮（高志）心が痛みます。ごむりなさらないで下さい。人参は皆ピノキオの鼻に似て（み）ち誰もが知るピノキオの鼻、楽しくほっこりしました。
金霞誌代二〇一八年一月～十二月6千円同封いたしました。十二月二十二日光成高志様みち様
私の感想文が「ぎりぎり間に合った」とメールをもらつたのが十二月二十一日。それから僅か二日後に、私の手許に十一月号が届いた。まるで手練の手品を見るようで果然となつた。しかし、この早業の蔭にあつたはずの主宰の苦心と努力に思いが及ぶと、自然と頭が下がつた。師走に入つて十一月号を、さらに追いかけて十二月号をと二冊を刊行。それだけでも驚くべきことなのに、誌上に選句評・俳窓評論纂・蕉風研究連載・報告・感想と健筆をふるうほか多数の句作発表をし、多数の受贈誌もじつに豆に読み感想・抜粋までしている。我孫子日記を見ると、その間に例会二回、吟行一回、奈良旅行、毎週の大学公開講座受講、文化祭参加、谷中散策のほか、どうやら菜園の農作業までこなしている。それも何回もの病院の入通院、四日に及ぶ臥床と持病の身をかばいながらの活動なのだから、私は言葉を失うほかない。体調が悪

いから例会は欠席などと言い、平然と投句まで主宰の許に押しつけている自分を省みると、なんとも恥ずかしくなる。どうやら人間の出来具合が違うとしか思えない。

これまでの人生で色んな人に出会つたが、長い俗生活の中に於いて青年の如き生新な精神を保ち、失わなかつた珍しい存在という印象を主宰に受けるのである。大企業でも理系専門分野で一匹狼的キヤリアを通してきただので、生来の文人肌が損なわれず晩年に開花したというべきか。職業と風雅の二本道をゆく俳人がほとんどだが、主宰もそれに近くありながら、広く文雅の世界へ憧れを抱いてやまない文人気質を私は強く感じる。その核心は眞の風雅の探求であり、それを連衆とともにいうことであろう。その連衆の一人に加えてもらえた幸運は、さる大学のオーブンカレッジの源氏物語講義受講で隣席に座つたことが機縁だった。しばらくは源氏物語講義の副産物のような気持ちだったが、次第に俳句に引き込まれて今や白金葭が私の関心の主たるものになつてゐる。書くところによると、昭七さんの宮沢賢治評論やB.S番組・新聞などの賢治特集に刺激を受けて、昔からの賢治への関心をとみに強めているとか。十一月号では、昭七さんの菊坂の

句に在京時代の賢治を偲び、「銀河鉄道の夜」を完読、賢治の愛した多くの星々から芭蕉の天の川の句、誓子の星

恋の句集をあげ、大乗仏教の文学的表現として賢治と三島の類似性や賢治の天才的な在りようにも言及している。抱懐する関心の大きな広がりを示すとともに、「白金葭」が狭い俳句のジャンルを超えて日本文学の視野も有するのであることをも告げるものである。また、連載じつに四十回に近い「芭蕉の軽み以後」は、その関心の向け方が単なる一時的な移り気によるものでなく、徹底して探求するという長期の持続心に支えられていることを語る。本居宣長の「古事記伝」は起稿から脱稿までじつに三十年かかっている。主宰の芭蕉論もそれには及ばないまでも、気迫において負けないで続けて欲しい。そのためにも健康にくれぐれも御留意願いたいと思つています。臆測まじりの失礼な月旦評になつたところは、なにとぞお許しを。

(12.27 健メール)

おどるあこりようてにうちわひるがへし
すなあそびする「どもらにはなぶぶき
すずつけしこいぬのはしるにわすずし
たたかいのおわりきゆうじにあきのかぜ
もみじがりしついのこころいやしえす

(12.16 ケータイメール 輝子)

(踊る吾子両手に団扇翻し)
(砂遊びする子供らに花吹雪)

(鈴付けし子犬の走る庭涼し)

(戦いの終り球児に秋の風)

(紅葉狩失意の心癒しえず)

以上漢字変換は編集子

賀正 いつも句会を楽しみにしています。今年もよろしく指導願います。年末に白内障の手術しました。老いの坂を越えるのもなかなか大変です。ご健勝を祈ります。

平成三十年元旦 武者昭七

賀状添書き…忙しくて中々投句出来ませんが、今年はがんばりたいです。見捨てないで下さい。いい年でありますように祈っています(倅子)。昨年は久し振りになつかしかつたです。東京で吟行があるようでしたら又お教え下さいね。都合がよかつたら出席させて下さいね(高代)。新しき年のお岳喜び申し上げます。御夫妻のおかげで楽しい句会を本当に有難うございます。私もいつまで続けられるか自信がありませんが、どぞ本年もよろしくお願い申し上げます(多美子)。春立つや菰もかぶらず五十年(一茶)手賀沼のほとりに移り住んですでに五十余年、気づけば夫婦とも共白髪の後期高齢者。孫が置いていったオキナインコの無邪気な愛嬌がなによりの心の杖です。積ん読の本の山に挑戦する一方、俳句を始めてから俳書が増えて新しい本の山ができる圧迫感を覚え、俳句結社「白金葭」の会員、オープンカレッジの源氏物語

講座、インターネットの囲碁対局、総入れ歯のくせに食喰い気だけ旺盛、時に自転車で転んで青痣を作るなど、なんとか泰平の逸民の暮らしを送っています。佳き一年でありますようにお祈りします。今年もどうぞよろしく。今年も伴走するのを楽しみにしています(健二)。明けましておめでとうございます。早々に賀状を賜り恐縮しております。昨年も相変わらず俳句に明け暮れた一年でした。俳句を始めて一〇年が経ちましたが、未だに自分の目指す俳句の方向が見えません。このまま終わってしまうのかと焦る一方で、俳句を楽しんでいるからそれで良いかとも思っています。こんな私ですが、相変わらずの「指導をよろしくお願ひします(半寿)。今年は三人目の孫の手伝いも少し減り農作業の時間を持つことが出来るかしら」と皮算用?してしています。雑草だらけの畠は恥ずかしいです。でも思いと実行は別なんです。次から次へと思いもよらないことが生じるのが人生なのですよね。強い願望とケセラセラの織りなす綾衣が風に吹かれヒラヒラと・・今年も気を付けます(綾女)。ありがたい鑑賞を何回もいただき、その都度どんなに励まされたか分かりません。生ける限り会心の句を一句でも一句でもと欲張っています。みちさんにも色々お世話になります。夫唱必ずしも婦隨でない個性的句を、今年も又た

のしみに！（幸一）。中原道夫の「銀化」同人になりました。ささやかな目標をクリアーしました（興正）。御無沙汰ばかりですみません。今ぼくが最優先しているのは9条の会の活動です。今年もどうぞよろしくね！（達哉）。

寒中お見舞い申し上げます。朝は相当な寒さ、庭のバケツに汲み置きの水は一センチ厚の氷となっています。

寒さからお体をお守り下さいませ。（1.16 瑞子）

前略（定例句会の訂正了解しました。）一月十九日（金）は

当方ボランティアと重なりましたので、欠席説句させて頂きます。左記に控えを記しておきますのでよろしく。

会費は同封しました。（1.17 宏之助）

前略 新年句会の一句鑑賞の拙稿をお届けします。よろしくお願い申し上げます。只今降雪しきりです。お互い

い風邪転びに気をつけましょう。お大事に（健吟の程を。（122 孝三）

我孫子日記
12/15 例会
12/21 野田源氏2
* 12/25 JH
*2 1/1 初詣
*3 1/3 皆来
1/10 SOA 1
1/16 野田源氏3
1/17 SOA 2
1/19 例会

のしみに！（幸一）。中原道夫の「銀化」同人になりました。ささやかな目標をクリアーしました（興正）。御無沙汰ばかりですみません。今ぼくが最優先しているのは9条の会の活動です。今年もどうぞよろしくね！（達哉）。

寒中お見舞い申し上げます。朝は相当な寒さ、庭のバ

ケツに汲み置きの水は一センチ厚の氷となっています。

寒さからお体をお守り下さいませ。（1.16 瑞子）

前略（定例句会の訂正了解しました。）一月十九日（金）は

当方ボランティアと重なりましたので、欠席説句させて頂きます。左記に控えを記しておきますのでよろしく。

会費は同封しました。（1.17 宏之助）

前略 新年句会の一句鑑賞の拙稿をお届けします。よろしくお願い申し上げます。只今降雪しきりです。お互

い風邪転びに気をつけましょう。お大事に（健吟の程を。（122 孝三）

我孫子日記
12/15 例会
12/21 野田源氏2
* 12/25 JH
*2 1/1 初詣
*3 1/3 皆来
1/10 SOA 1
1/16 野田源氏3
1/17 SOA 2
1/19 例会

将門の社に歩き初詣
初点前日高昆布を土産とし
雉發つて驚かさるゝ初詣
神棚のタイの仏も煤払ふ
歳旦祭柏手高く響きたり

*3 箱根駅伝仲良く繰り上げスタート
東に三日日の日出月西に
歌留多読む朗誦調の婿の節
礼者来る成績表を携えて
礼者来る非常飲料携えて

歯固めのするめの足を割いてをり

編集後記

本誌は袋綴じなので4の倍数の頁で止めます。そのため今回も十六頁に収めるのに苦労しました。鑑賞文も冗長な部分は私の責任でカットしています。打込みの労力を減らすためお便り以外は、引き続き電子化稿をお送り下さるようお願いしています。

みち 高志 みち 高志 みち 高志 みち 高志

* 大型店まるでアメ横年の市
*2 電柱の間の初日が屋根の上
元朝や若き家族は洗濯すす

高志

白金霞1月号（通巻第八三号）平成二十年一月二十五日発行
編集・発行人 光成憲忠 発行所 二七〇・一一九 我孫子市南新木二四一七
○四一七一八七一〇六八表紙の題字・加納綾女 同写真は

一月二十五日の白金霞と富士山